

ジッド最初の劇作品『サウル』：サウル，メナルク，そしてオスカー・ワイルド

小坂，美樹
大阪大学：非常勤講師

<https://doi.org/10.15017/7162040>

出版情報：Stella. 42, pp.83-94, 2023-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：



ジッド最初の劇作品『サウル』

——サウル，メナルク，そしてオスカー・ワイルド——

小 坂 美 樹

アンドレ・ジッドにとって演劇は創作活動の中心にはない。しかしながら、非常に早い時期から劇作に取り組み、シェークスピア等の翻訳や自作品の脚色も含めた作家の舞台芸術への興味と実践は相応に長く豊かなものである。

早くも 1889 年 3 月の日記には、劇作にかんする記述が見られる。作家志望の 19 歳は「冷酷で仮借ない皮肉に満ちた戯曲」¹⁾に考えを巡らせるが、この作品が実際に書かれることはなかった。実際の作家人生は、約二年後、『アンドレ・ワルテルの手記』(1891)とともに始まる。狭い文学界とはいえ、処女作は一定の評価を獲得し、小説家として着実な足掛かりをつかんだにもかかわらず、ジッドは当時を「人生で最も混乱した時期」²⁾と回顧する。そうした迷いの時期に彼は再び戯曲の構想を練り、数年の準備を経て 5 幕の劇に仕立てあげた。旧約聖書『サムエル記』³⁾に題材をとった『サウル』である。

恩寵と失寵，神に翻弄される人間の悲劇——聖書が語るサウルとダビデの物語は、時空をこえて芸術家たちの想像力を刺激し、さまざまな詩，絵画，演劇，音楽が生みだされた。その長い伝統を受け継ぐ形ではあるものの、ジッド最初の劇作品はきわめて独特である⁴⁾。『サウル』の「聖書テキストからの徹底的な逸脱」に着目したアン・レピダス＝ラーナーは、「『サウル』において」作中人物たちが違う名で登場し、ゴリアトの殺害とロバ探しへの言及がなければ、もはや聖書とのつながりは認識できないだろう」と言い切る⁵⁾。この結論は極端としても、『アンドレ・ジッドと演劇』の著者ジャン・クロードもまた『サウル』における自由な聖書解釈を以下のように要約する——

ジッドは [...] 出来事の起こった順序を入れ替え、複数のエピソードや登場人物を割愛し、他の人物には、聖書にはない動機を与えて、その行動を変えてしまう。⁶⁾

こうした大胆な再構築により、『サウル』には「作者自身の関心事が強く刻印さ

れている」⁷⁾。本稿では、作品の主役サウルに反映するジッドの「関心事」について、特にオスカー・ワイルドとの関わりを解釈の鍵のひとつとして検討したい。というのも、『サウル』の構想から執筆にかけての時期は、ワイルドの絶頂と凋落に重なっており、またジッドはいくらかの距離を保ちつつも、このアイルランド人作家に最も強く影響されたフランス人作家の一人と思われるからである⁸⁾。ワイルドがジッドの性的指向に決定的な役割を果たしたことは自伝『一粒の麦もし死なずば』が語る通り。さらにジッド文学において、ワイルドはメナルクという名の登場人物として『地の糧』はじめ複数の作品に現れる。ワイルドの存在は、ジッドの人生と文学にとって無視できるものではないのである。たしかに聖書にもとづく『サウル』にメナルクは登場しない。しかしジッドは、同作が『地の糧』と対をなすものと明言する。『地の糧』のメナルクがキング・オブ・ライフに大きく負っていることを踏まえれば、その「裏面」⁹⁾のサウル王についても、ワイルドとの関わりから考察するのはけっして的外れなことではあるまい。

『サウル』——『地の糧』の解毒剤あるいは平衡錘

『サウル』のテーマと執筆のきっかけについてジッドは簡潔に説明する——

あらゆるものを何ひとつ拒むことなく受け入れてしまうこと (une disposition trop passive à l'accueil) による人格の崩壊がまさに私の『サウル』のテーマなのです。[…]
『地の糧』を書きあげてすぐ、その解毒剤 (antidote) あるいは平衡錘 (contrepoids) として『サウル』を書きました。¹⁰⁾

あらゆる欲望を肯定し、あらゆる制約からの解放を謳う『地の糧』では、来るものすべてを「受け入れる心構え (une disposition à l'accueil)」¹¹⁾が称揚される。ゆえに作中でメナルクは自らの魂を、入りたいものは誰であれ入ることができる「四つ辻に開かれた宿屋」¹²⁾に譬える。しかし同時にその「危険性」¹³⁾もジッドにははっきりと見えていた。ゆえに『サウル』においては、さまざまな欲望を無制限に受け入れた結果、それらに内側から食いつぶされる老王を、エン・ドルの口寄せの女は「嘆かわしいまでに何もかも受け入れてしまう王 (Roi déplorablement dispos à l'accueil)」と呼ぶ。彼女はさらに、狂乱する王に向かって最期の声を絞りだす。「扉を閉めよ」と [744]。『地の糧』で肯定的に描かれた態度が、『サウル』では否定的に示されることで、ジッドの言葉通り、『サ

ウル』は『地の糧』の解毒剤あるいは平衡錘であることが了解される。

『地の糧』の出版は1897年5月。『サウル』はその直後から翌年4月の間に書かれた。ジッドにしては短い執筆期間だが、執筆に先立つ作品の構想は時間を大きく遡る。ヴァレリーへの手紙によれば、本作のテーマは「6,7年前から〔ジッドの〕頭にあった」¹⁴⁾。すなわち『サウル』の着想を得たのは1891年前後となる。先述のように、ジッドはまだ駆け出しの小説家であった。文学においても人生においてもいわば修業時代の青年が、マラルメ、エレディアなどのサロンに足しげく通うなかで出会ったのがオスカー・ワイルドである。パリ文壇の「一大イベント」¹⁵⁾として注目を集めていたワイルドとの出会いは1891年11月末のこと。ジッドは、15歳年長の「耽美主義者」¹⁶⁾に強い感嘆の念を抱き、食い入るように見つめながら、彼の話に聞き入っていた様子は自伝が余すところなく伝える。当時の「サロメ・ブーム」¹⁷⁾のなか、パリ滞在中のワイルドは『サロメ』の執筆に取りかかる。英語ではなくフランス語で書かれた戯曲を、ロンドンにまで赴き手直ししたのは、ジッドの友人ピエール・ルイスだが、ジッドもまたその創作に立ち会った一人だ¹⁸⁾。ワイルドに触発されたのかどうかは不明だが、そのころジッドは「3カ月ほど前から、シンメトリーなドラマについて考えている」¹⁹⁾とヴァレリーへ書き送る。このドラマもまた夢に終わり、『サウル』とのつながりは見いだせないが、小説デビュー後もジッドの劇作への意欲が失われていないことは分かる。

『サロメ』出版（1983年）の翌年、フィレンツェで偶然再会したワイルドは凋落の道を歩み始めていた。続いて1985年のアルジェリアでの再会の折には、ワイルドはすでに危機的な状況にあった。ロンドンに戻れば有罪となるのは必至なので、帰国を思いとどまらせようとするジッドにワイルドは応える――

私はできる限り遠くまで行かなければならない……。もうこれ以上遠くへ行くことはできない……。だから何かがやってこなければならぬ、何か別のことが……。²⁰⁾

帰国したワイルドにやってきたのは、2年間の強制労働であった。ワイルドには彼なりの考えがあり、そのうえでの行動と結果なのだろうが、ジッドが覚えていたワイルドの言葉は、メナルクあるいはサウルの「来るものはすべて受け入れる」姿と通じていないだろうか。その受け入れの姿勢により、ワイルドは自ら破滅へと向かう。刑期を終えたワイルドに文学的創造力は残っていなかった

た。彼の哀れな姿を前に、ジッドは『サウル』の執筆に取りかかるのだが、いったん二人が出会った頃に話を戻そう。

『サウル』——月光のもとで

ジッドがパリで毎日のようにワイルドと過ごした数週間、ワイルドは『サロメ』を書き進めた。『サロメ』は『サウル』同様、聖書にもとづきつつも、そこから大きく逸脱した物語ではある。しかし言うまでもないが、『サロメ』が直接に『サウル』創作のきっかけとなったわけではない²¹⁾。また、『サロメ』は検閲によりロンドンでの上演を禁じられ、1896年2月パリにてようやく初演を迎えたが、服役中のワイルドも、旅行中のジッドも劇場に赴くことはなかった。だが興味深いことに、両作品の冒頭、幕開きの場面は同じ雰囲気を醸し出す。まずは『サロメ』幕開けのト書き——

ヘロデの宮殿 (palais)、饗宴の間へと通じる広いテラス。幾人かの兵士が手摺りに肘をついている。右手には巨大な (énorme) 階段。左手奥には、青銅に覆われた古い貯水槽。月の光 (claire de lune)。²²⁾

次に『サウル』第1幕の舞台指示——

王宮 (palais)。ほとんど装飾のない大きな広間。右手には、宮廷の内部に通じるいくつかの扉。左手に並んだ窓口には帷がおろされている。[……] 左右に壁に代わって何本ものどっしりとした円柱が並ぶ。舞台中央、円柱と円柱の隙間を巨大な (énorme) 玉座が占める。円柱の間から、遠くにテラスが見える。[……] 夜である。テラスの奥には、月光に照らされて (éclairé par la lune) 祈るサウル王の姿が見える。[699]

宮殿、テラス、月明かり。聖書のエピソードを描くふたつの劇は、いずれも聖書には描かれていない月光のもとで幕を開ける。

『サロメ』において月は単なる背景ではない。それは舞台を照らし、登場人物たちはそれぞれの思いを月に投影する。幕開けすぐ、小姓により月は「墓から出てきた女」[1229]、「死んだ女、死者を探す女」に譬えられる。続く若いシリア人にとって、月は「黄色いパールをまとい、銀色の足をした小さな王女、[……] まるで踊っているようだ」[1230]とサロメの姿と重なる。ヘロデもまた、義理の娘の運命を予見するかのように、今宵の月は「愛人たちを探し求める狂った女のようなか[……] 一糸まとわぬ姿で」[1241]と妻に問う。サロメにとっては、その同じ月が「小さなコイン」あるいは「小さな銀色の花」[1233]のよ

うに見え、自身の純潔を象徴する。そして月光のもとサロメの顔は、「青白い(pâle)」と繰り返し描写される。

『サロメ』において月は登場人物それぞれの欲望を映しだす。そのなかで、月にまったく興味を示さない人物がいる。サロメの母でヘロデの妻、ヘロディアスだ。彼女は「いいえ、月は月に似ている。それだけ」[1241]とぴしゃりと夫に言い返す。続いて彼女は、神学論争にふける者たちに対しても「彼らは頭がおかしいのです。月を見すぎたのですわ」と言い放つ[1246]。月と狂気の結びつきはヨーロッパ、さらには古代ローマまでも遡る慣習的なものではある²³⁾。しかし『サロメ』の元となる聖書に月の描写はない。またワイルドが大いに参考にしたと公言するフローベールの『ヘロディアス』にも、「月が昇りはじめた」²⁴⁾の一行があるのみ。『サロメ』における月の役割はしたがってワイルドの独創と考えられる。

一方、『サウル』において月は、ワイルドの劇とは違った形で主人公の運命を示唆する。神に見捨てられながらも月明かりのもとで祈る王に対して、王妃はうわべだけの気遣いをみせる――

(まめまめしい様子で) サウル殿、昨夜はいかがお過ごしでございましたか。本当に青白い(pâle)お顔をなさって。まるで月の輝き(éclat de la lune)が、まだ額に残っているよう。よろしいですか、そのようにテラスにばかりおられてはいけません。[…]
夏の満月は、わたくしどもの思いに害を及ぼすとのことですから。[709]

『サロメ』において月と狂気を結びつけたヘロディアスの台詞は、『サウル』の女王が夫にかけた言葉と響きあう。『サウル』劇中で月を眺める者はいない。けれども月が単なる背景でないのは『サロメ』と同じである。『サウル』でも月は欲望と狂気あるいは死を照らす。幕開け早々、月明かりのもと舞台中央に現れるのは、人ならぬ悪魔たちだ。

『サウル』の悪魔たち――ふたつの秘密、ひとつの答え

『サムエル記』では、神に見放されたサウルは「主から来る悪霊」(上16:14)に苛まれ、精神を病んでゆく。ところが『サウル』には悪霊への言及がない。王を狂気に陥らせるものとしてジッドが代わりに登場させるのが「悪魔(démon)」である。異形の者たちの役割について作者は、「《僕の》悪魔たちが他の悪魔と違うのは、彼らがサウルの外側にはいないことだ」²⁵⁾と説明する。すなわち、劇

中の悪魔たちは「サウルの衝動と欲望を表出し、彼の内面の苦悩と情欲を形にする。彼らは老王の人格を損なう悪徳と悪の力の化身なのだ」²⁶⁾。

冒頭、析る主役を遠景に、7人の悪魔が舞台に次々と現れる。彼らはそれぞれ「怒り (colère)」「狂気 (démence)」「色欲 (luxure)」「[700-701]」などと名乗り、押しあい押しあい、ふざけあう。はじめはサウルに悪魔たちの姿は見えず、声も聞こえない。だが次第に王は彼らと言葉をかわし、酒を酌みかわすまでになる。ただし、悪魔たちはサウル自身の欲望なのだから、そこに本来の意味での対話はない。ジッドがヴァレリーに伝えたように、「悪魔たちは、ひとえに独白 (monologue) を表現するためにある」²⁷⁾ のだから。

サウルの欲望は、最後には自身を破壊してしまう。第5幕5場(6場で終幕)、野営テントの前にわらわらと集まる悪魔たちをサウルは一人残らず中へと迎え入れる。大騒ぎする彼らに突きとばされ、隅に追いやられたサウルは「私は完全に排除されてしまった」[769]とつぶやく。この場面は、『地の糧』第4の書において、自らの欲望たちにより家から追いだされたヒュラスの挿話に対応する。すべてを受け入れることの危険について、『地の糧』では「控えめに示された批判」が、『サウル』において「前面にきた」²⁸⁾ のが見てとれる。

悪魔がたった一人で現れることもある。例えば第4幕5場。『サムエル記』では、洞窟でダビデがサウルのマントの裾をこっそりと切り取り、己の忠義を証明した。その場面をジッドは大幅に改変する。洞窟にサウルを連れてきたのは悪魔。そこにダビデがサウルの息子ヨナタンとともにやってくる。サウルに気づかない若い二人を満月が照らす。次に月はゆっくりと動き、サウルが地面に置いた王冠に光があたる。そして最後、月明かりの方へ進みでて立ちつくすのは、切り裂かれたマントをだらしなく纏うサウル。聖書とは異なり、劇中の王は自分の後継が誰かを知らない。しかし、月の光は地に転がる王冠を照らし、それを拾いあげるのは王子ヨナタンではなくダビデである。月によって王国の未来と現王の失墜が浮かびあがる。

悪魔との会話がサウルの独白であることを最も明確に示すのは、「黒い悪魔 (un démon noir)」が登場する第4幕2場であろう。そこでのサウルは、王権を象徴する冠も緋色のマントも王杖も身につけていない。悪魔は「サウル王よ、お前の冠をどこに置いてきたのだ。ダビデのところか?」、「サウル王よ、お前のマントをどこに置いてきたのだ。[...] ダビデのところか?」と繰り返し問

う。王杖についても同様の問いが発せられるが、今度はサウル自身が悪魔の問いを引きとるかのように、「ダビデのところだ」と答える [751]。舞台のうえで自身の欲望と話すサウルの様子は、ジッドが回想するワイルドの姿を彷彿とさせる——

ワイルドは自身の最も真摯な感情さえ、気取りの上着で覆っていた。それは少なからぬ人たちにとって我慢ならないものだった。彼は役者であることをやめようとはしなかったし、そのようなことはできなかっただろう。彼が演じているのは彼自身であった。台詞そのものは真摯なものだが、その台詞を彼に絶えず吹き込むのは悪魔(démon)であった。²⁹⁾

サウルが自らの欲望により破滅するように、ワイルドもまた内なる悪魔により破滅してゆくようにジッドには見えたことであろう。

悪魔が一人で現れるとき、サウルの欲望は「未来を知りたい」という思いに集約される。王は「未来を知るのが自分のみならば、未来を変えることができるだろう」と、未来を予言する魔術師たちをことごとく亡き者にした。彼は未来について神に、星に尋ねるが、答えを得ることはない。「私の後を継ぐ者が誰なのか、そのことを私は知ることができないのだ」[702]。劇中でそれは「秘密(secret)」としてサウルを苦しめる。ジッドの独創性はこの「秘密」にある³⁰⁾。「誰が自分の王国を継ぐのか」、「誰を自分は愛しているのか」。しかもサウルの秘密——政治的なものと感情的なもの——は二重になっており、いずれの問いに対しても答えはひとつ、「ダビデ」である。

聖書では、早い段階でダビデへの塗油が語られる。サウルもまた、次の王は嫡子ではなく若い羊飼いであることをサムエルにより告げられる。さらにサウルが理性を失い、槍を投げてダビデを殺そうとするのは、神より送られた悪霊の仕業であり、ダビデへの執拗な殺意は、人望を集める若者への嫉妬が原因であることも示される。つまり聖書の語るサウルに秘密はない。

一方ジッドは、ダビデの名をサウルにとっての「秘密」とした。しかもそこには作者の皮肉が込められている。後継にかんする「王の秘密」[716, 717] は、第2幕1場において、一人の男によりダビデの塗油が語られるものの、ただちに従僕により口止めされ、王には伝わらない。第3幕7場においても、サムエルの亡霊がダビデの名を挙げ、サウルの運命を告げるが、そのとき肝心のサウルは気を失い倒れている。ダビデの名は、王にとってのみの秘密なのだ。この

政治上の秘密に、もうひとつの秘密が重なる。すなわちジッドは、サウルのダビデへのふるまいの動機を若者への欲望とした。老王は、やはり皮肉にも、自分の内に潜む秘密を自覚できない。第3幕8場において、サウルは情愛を込めたダビデの名「ダウド」[748]を口にするが、そのとき彼は正気ではない。

『サウル』はジッドが同性愛を初めて「はっきりと分かる形で」³¹⁾舞台にのせた作品である。『サウル』に限らず、「少年愛のモチーフ」は、ジッドの戯曲に繰り返し現れるモチーフのひとつであり、「作者の個性の最も秘められた場所にある」³²⁾ものだ。

『サムエル記』では、ヨナタンとダビデは強い絆で結ばれる。「ヨナタンの魂はダビデの魂に結びつき、ヨナタンは自分自身のようにダビデを愛した」(上18:1)。そしてダビデは友の戦死を哀悼し、その愛を「女の愛にまさる驚くべきあなたの愛」(下1:26)と詠ずる。聖書の解釈としては許されまいが、若い二人の絆を同性愛として描く芸術作品は少なくない。ワイルドもまた、自身の裁判においてアルフレッド・ダグラスの詩『ふたつの愛』にかんする尋問の際、「今世紀における《あえてその名を言わぬ愛》とは、年長者(an elder)が若者(a younger man)へ抱く卓越した愛情のことだ。かつてダビデとヨナタンの間にあったものだ」³³⁾と聖書の二人を引きあいにする。

たしかに『サウル』においても、若者たちの絆には、同性愛としての解釈が一層可能となるような修正が加えられる。『サムエル記』のヨナタンは若いとはいえ、弓の名手であり、父王とともに戦功をあげる。一方、ジッドが描くヨナタンは、常に弱さが強調され、武具は重すぎて身につけることすらできない。そうした「珍しい小鳥のように弱い」[729]王子を守るのが「野生の鳥」[747]ダビデである。『サムエル記』のダビデには、サウルの娘ミカル、愚夫から逃れたアビガイル、さらにもう一人の妻がいる。後に彼がバト・シェバを娶るのも我々は知っているが、劇中「17歳」[714]のダビデは常に子供(enfant)と呼ばれる。しかしジッドが描くダビデとヨナタンの愛情は、ワイルドが語ったような年長者から若者へのものではない。ジッドはこの「年上から年下」への愛を、サウルからダビデへの情愛とした。聖書の解釈としてはあり得ないものだが、作者自身は、それは聖書を裏切るものではなく、「嫌うことはできない、気に入られたい」[735]と強く惹かれる若者に対して殺意を抱き、何度も槍を投げつける王の矛盾した「心理への説明として満足できるものはそれ以外に考えられな

い」³⁴⁾と述懐する。

とはいえ、同性愛のテーマのみを強調することは慎むべきであろう。『サウル』を読んだヴァレリーが、「殿方たちの不道徳で対立しあう恋愛」³⁵⁾と冗談めかした感想に対して、ジッドは反論する――

はっきり言って、僕はそのこと（《風紀紊乱》のこと）はほとんど考えていない。[…]
ダビデが登場するのも、単に、[サウルの]内面のドラマ、自分を害するものを受け入れ、愛するという悪徳そのものを描くためだ。³⁶⁾

友への手紙でジッドは、本作のテーマ「すべてを受け入れることの危険」についてより明確に定義する。サウルは冒頭、「わが感覚は外に向かって開いている。快きものは何ひとつとして、余に気づかれずに過ぎることはない」[702]と独り言³⁷⁾つ。しかし実際には、イスラエル王のもとにやってくるのは良きものばかりではない。口寄せの女の台詞のように、「[サウル]にとって魅惑的なものは、[彼]に敵対するものだ」[744]。サムエルの亡霊もまた、「お前を殺すものをお前は受け入れる」[741]とサウルに告げる。

自分を殺すものを愛し、自分が愛するものを殺そうとするサウルの行動は、刑期を終えたワイルドが唯一作品として世に出した『レディング監獄のバラッド』（以下『バラッド』）³⁷⁾の一節をただちに想起させる。獄中での悲惨な体験を昇華した詩は冒頭と末尾で繰り返す――「しかしながら、男はみな愛するものを殺すのだ」³⁸⁾。

結 語

以上のように、『サウル』には、月の描き方からは『サロメ』との、王の同性愛からは『バラッド』との関わりが見られた。また悪魔と語るサウルは、ワイルドの姿と重なる。ただし、これをワイルドからジッドへの直接の影響と考えることはできまい。ジッドが出版前から『サロメ』を知っていたのは確かだとしても、ワイルドの戯曲を熟読したうえで、月を自作に採用したという証言は見あたらない。『バラッド』についても同様である。出獄後のワイルドがノルマンディーで『バラッド』に取り組んでいたとき、『サウル』執筆中のジッドは彼を訪ねている。二人の間で何らかの創作上のやり取りがあったかもしれないが、『バラッド』のフランス語訳が出たときには、すでに『サウル』は完成している。むしろ注目すべきは、両者の文学的想像力の近似であろう。『地の糧』のメ

ナルクは、『背徳者』で再びジッド作品に登場する。そのときのメナルクは「おろかで恥ずべき裁判」³⁹⁾により社会的評価を落としていた。メナルクの解毒剤としてのサウルをワイルドとの観点から検討することで、『地の糧』『サウル』『背徳者』の繋がりがいっそう明確に理解できるのである。

註

- 1) André GIDE, *Journal I (1887-1925)*. Édition établie, présentée et annotée par Éric MARTY, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1996, p. 52.
- 2) André GIDE, *Si le grain ne meurt*, in *Souvenirs et voyages*. Édition présentée, établie et annotée par Pierre MASSON, avec la collaboration de Daniel DUROSAY et Martine SAGAERT, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 2001, p. 250.
- 3) 聖書は新共同訳（『聖書』, 日本聖書協会, 1989年）を用いる。『サムエル記』からの引用には章番号と節を本文中に示す。
- 4) ジャン・ド・ラ・タイユ, ヴィットーリオ・アルフィエーリなど, 先行作品との比較については次の論考を参照—— Karine GERMONI, «Saül ou la réécriture gidienne du mythe biblique», *Bulletin des Amis d'André Gide*, n° 140, octobre 2003, pp. 485-501.
- 5) Anne LAPIDUS LERNER, *Passing The Love of Women. A Study of Gide's Saül and Its Biblical Roots*, Lanham (MD) : University Press of America, 1980, p. 87.
- 6) ジャン・クロードによるプレイアド版『サウル』の解題より (voir André GIDE, *Saül*, in *Romans et récits. Œuvres lyriques et dramatiques*. Édition publiée sous la direction de Pierre MASSON, avec, pour ce volume, la collaboration de Jean CLAUDE, Alain GOULET, David H. WALKER et Jean-Michel WITTMANN, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 2009, t. I, p. 1391 [notice]). 『サウル』からの引用は上記の版の頁数を本文中 [] 内に示す。邦訳は既訳を参考にしたうえでの拙訳。
- 7) Jean CLAUDE, *André Gide et le théâtre*, 2 vol., Paris : Gallimard, coll. «Cahiers André Gide» n°s 15 et 16, 1992, t. II, p. 192.
- 8) ワイルドへの追悼文において、ジッドは自分が「[ワイルドの] 話を最も熱心に聞いたであろう者の一人」と述べる。Voir André GIDE, «Oscar Wilde», in *Essais critiques*. Édition présentée, établie et annotée par Pierre MASSON, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1999, p. 837.
- 9) Jean CLAUDE, «Saül ou l'envers des Nourritures terrestres», *Littératures contemporaines*, n° 7 *André Gide*, Paris : Klincksieck, 1999, pp. 211-226.
- 10) *Œuvres complètes d'André Gide*. Édition augmentée de textes inédits établie par

- L. MARTIN-CHAUFFIER, Paris : Éd. de la NRF, 1939, t. XV, p. 532 (lettre à Eugène Ferrari du 15 mars 1928).
- 11) André GIDE, *Les Nourritures terrestres*, in *Romans et récits. Œuvres lyriques et dramatiques*, op. cit., t. I, p. 359.
 - 12) *Ibid.*, p. 381
 - 13) *Œuvres complètes d'André Gide*, op. cit., t. XIV, p. 407 (lettre à Victor Poucel du 27 novembre 1927).
 - 14) André GIDE - Paul VALÉRY, *Correspondance 1890-1942*. Nouvelle édition établie, présentée et annotée par Peter FAWCETT, Paris : Gallimard, coll. « Cahiers André Gide » n° 20, p. 515 (lettre à Valéry du 21 octobre 1898).
 - 15) 『レコー・ド・パリ』紙 1891 年 12 月 19 日号の表現は «le great event» (*L'Écho de Paris*, samedi 19 décembre 1891)。
 - 16) GIDE - VALÉRY, *Correspondance 1890-1942*, op. cit., p. 186 (lettre à Valéry du 27 novembre 1891).
 - 17) 宮崎かすみ『オスカー・ワイルド——「犯罪者」にして芸術家』, 中公新書, 2013 年, 97 頁。
 - 18) ワイルドは 1892 年春にもパリを訪れ, 『サロメ』原稿のためビエール・ルイスと会っている。ルイスの手帳には, 4 月 15 日にはジッドも食事の席にいたとあるが, ジッドの日記や手紙にその記録はない。Voir Pierre MASSON, Jean-Pierre PRÉVOST, *André Gide - Oscar Wilde. Deux immoralistes à la Belle Époque*, Paris : Orizons, 2016, p. 107.
 - 19) GIDE - VALÉRY, *Correspondance 1890-1942*, op. cit., p. 189 (lettre à Valéry du 4 décembre 1891).
 - 20) André GIDE, «Oscar Wilde», in *Essais critiques*, op. cit., p. 846.
 - 21) Voir Katherine BROWN DOWNEY, *Perverse Midrash. Oscar Wilde, André Gide, and censorship of biblical drama*, New York / London : Continuum, 2004. 同書では, 『サロメ』と『サウル』が, いずれも聖書に潜む倒錯を描いたとして, 英国の検閲事情とからめて論じられている。
 - 22) Oscar WILDE, *Salomé*, in *Œuvres*. Édition publiée sous la direction de Jean GATTÉGNO, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1996, p. 1229. 本文中では『サロメ』の引用末尾に上記の版からの頁数を [] 内に示す。邦訳は既訳を参考にしたうえでの拙訳。
 - 23) 「サロメ」, 『オスカー・ワイルド全集 III』, 西村孝次訳, 青土社, 1980 年, 385 頁 (訳注 71)。
 - 24) Gustave FLAUBERT, *Hérodias (Trois contes)*, in *Œuvres II*. Édition établie et annotée par A. THIBAUDET et R. DUMESNIL, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1952, p. 667.
 - 25) GIDE - VALÉRY, *Correspondance 1890-1942*, op. cit., p. 498 (lettre à Valéry datée

- du 27 juillet 1898).
- 26) Jean CLAUDE, *André Gide et le théâtre*, *op. cit.*, t. II, p. 85.
 - 27) GIDE - VALÉRY, *Correspondance 1890-1942*, *op. cit.*, p. 516 (lettre à Valéry datée du 21 octobre 1898).
 - 28) Claude MARTIN, *La Maturité d'André Gide. De «Paludes» à «L'Immoraliste» (1895-1902)*, Paris : Klincksieck, 1977, p. 224.
 - 29) André GIDE, *Si le grain ne meurt*, in *Souvenirs et voyages*, *op. cit.*, p. 301.
 - 30) Voir Patrick POLLARD, *André Gide. Homosexual moralist*, New Haven / London : Yale University Press, 1991, pp. 328-329.
 - 31) Claude MARTIN, *La Maturité d'André Gide*, *op. cit.*, p. 278.
 - 32) Jean CLAUDE, *André Gide et le théâtre*, *op. cit.*, t. II, p. 202.
 - 33) Michael S. FOLDY, *The Trials of Oscar Wilde. Deviance, Morality, and Late-Victorian Society*, New Haven / London : Yale University Press, 1997, p. 117.
 - 34) Voir Éric MARTY, *André Gide. Entretiens Gide - Amrouche annotés et introduits par Éric MARTY*. Nouvelle édition revue et corrigée, Tournai : La Renaissance du livre, 1998, p. 172.
 - 35) GIDE - VALÉRY, *Correspondance 1890-1942*, *op. cit.*, p. 494 (lettre à Gide du 13 juillet 1898).
 - 36) *Ibid.*, pp. 515-516 (lettre à Valéry du 21 octobre 1898).
 - 37) 原題は「The Ballad of Reading Gaol」, 邦題は宮崎かすみ〔前註18〕に従った。
 - 38) Oscar WILDE, *La Ballade de la geôle de Reading*, in *Œuvres*, *op. cit.*, pp. 46 et 64.
 - 39) André GIDE, *L'Immoraliste*, in *Romans et récits. Œuvres lyriques et dramatiques*, *op. cit.*, p. 647.